

令和5年 No.84
夏おぼん号

あきばさん

発行人/発行所
秋葉山 新井 寺
272-0144
千葉県市川市新井
1丁目9の1
電話047-357-8319
FAX047-357-8399
mail: info@shinseiji.jp
http://www.shinseiji.jp
郵便振替00150-2-282968

お盆の行事と

ろうせんいん

新寺「瓏仙院」の認可

当山住持

令和五年も始まったと思えば、早くも折り返し月の七月、「お盆」の月に入りました。まさに、無常の理(ことわり)を感じます。

お盆の行事は、私たち日本人にとって、大切な国民生活の一つです。私たちが今生かされている「命」「人生」のみならず、何代も継承されてきたご先祖様です。したがって、私たちはご先祖様に対して常に「おかげさまで。ありがとうございます」と感謝の気持ちをもって日常生活を有難く生かされています。とくに、年に一度限りの大切なお盆の行事には、ご先祖様をま心に込めて迎え、それぞれにこの上ないご供養をおつとめ申し上げ、功德を積み重ねておられることと存じます。どうぞ、さらにさらに、ご精進ください。



お寺から皆様に有難い報告がございます。かねてより、松戸市に新しいお寺を建て(新寺建立へしんじこ

んりゅうご)、国に宗教法人の認可申請中でありました【曹洞宗「瓏仙院(ろうせんいん)】が、おかげさまで文化庁・千葉県知事の認証を受けて正式に認可され、登記等、すべての手続きが完了しました。ここに、名実ともに【宗教法人「瓏仙院】がめでたく誕生しました。

この瓏仙院の新寺建立の発願は、現住職が前任職(師匠)の命を受けて、自身の法祖父にあたり、「世界の禅師様」と称された故高階瓏仙禅師(たかしなろうせんぜんじ)様(左上写真)への報恩行として、また、地域社会の平和のために、仏天のご加護のもと、有縁無縁の皆様のご協力を得、万難を超越して大願成就できましたお寺です。ご縁の皆様には、感謝多謝でございます。

故高階禅師様は、世界中の多くの人びとに慕われ、親しまれた禅師様です。国内にあつては、曹洞宗の大本山永平寺七十一世、大本山總持寺独住十二世、そして曹洞宗の最高峰である管長職の重責まで、終生おつとめたまわり、九十三歳の長寿をもって天寿を全うされました。願わくは、故高階禅師様のご遺徳のもとに、瓏仙院が世界平和のため、地域社会のために少しでも活用されますことを願ってやみません。

合掌



杉木立に囲まれた「宝慶寺(ほうきょうじ)」参道と山門(奥)

梅花流詠讃歌に学ぶ瑩山禅師様 第2回

七〇〇回大遠忌にちなんで

◆ 太祖常済大師瑩山禅師

修行御和讃(菩提)

明年二〇二四年の太祖瑩山禅師様の七〇〇回大遠忌にちなみ、梅花流詠讃歌の歌詞を通じて瑩山禅師様の生涯やみ教えを学ぶシリーズ、第二回は、ご修行時代のエピソードを学んでみたいと思います。

● 慈悲の聖者となりたもう

(一) 宝慶の山夏(なつ)のころ

怒りしときに母(はは)ぎみの

み姿(すがた)うかび それよりは

慈悲(じひ)の聖者(しょうじや)となりたもう

瑩山禅師様は、師匠様の懷持(えいぢ)禅師様(永平寺第二代)が亡くなると、義介(ぎかい)禅師様(永平寺第三代)について、ひたすら坐禅修行に励(いた)みました。そして、十八歳のとき、諸国(しよこく)行脚(ぎやく)の旅に出(い)ます。

最初にたずねたのが、越前大野(えちぜんおおの) (福井県大野市)の宝慶寺(ほうきょうじ)の寂円(じやくえん)禅師様(寂円禅師様)は、道元(だげん)禅師様とともに中国(ちゆうごく)天童山(てんどうざん)の如浄(にょじやう)禅師様(如浄禅師様)のもとで修行し、その後、道元(だげん)禅師様をお慕(たの)いして来日(らいにち)帰化(きけ)した中国(ちゆうごく)僧(そう)です。宝慶寺(ほうきょうじ)は、その中国(ちゆうごく)の天童山(てんどうざん)景德寺(けいといとくじ)にならってつくられたといわれます。瑩山(えいざん)禅師様は、寂円(じやくえん)禅師様のもとで、直接(じきじやく)会(あ)うことがかなわなかつ

た如浄(にょじやう)禅師様や道元(だげん)禅師様のへの念(ねん)いを深くし、さらに仏道(ぶつだう)修行(しゆぎやう)への志(し)をあつめて修行(しゆぎやう)に励(いた)まれたことでしょう。

やがて、「維那(いなの) (修行僧(しゆぎやう)の指導(しゆだう)監督(かんとく)役(やく))」という重要なお役に抜擢(はくたく)されるほどになりました。そのときの瑩山(えいざん)禅師様は二十歳(にじゅうさい)前後(ぜんご)、瑩山(えいざん)禅師様のすぐれた力量(りきやう)をうかがい知(し)ることができ(き)ます。そのことによ(よ)って、ほかの修行僧(しゆぎやう)からの心(こゝろ)ない言葉(ことば)を受け、怒(い)り心頭(しんとう)に発(は)してしま(ま)うのですが、母(はは)の深い慈悲(じひ)のおもいとその姿(すがた)が心(こゝろ)に浮(う)かび、瞋恚(しんゑい)のふるまいをすることはありませんでした。そして、これより腹(はら)を立て(た)てまいと誓願(ちかま)し、慈悲(じひ)の心(こゝろ)を養(やしな)う修行(しゆぎやう)をさら(さら)に積(た)まれていく(い)くのでした。

● 深き悟りを得たまえり

(二) 師(し)に随(したが)いて 大乘寺(だいじやうじ)

親(おん)しく受(う)けし 御教(おんおし)え

平常(ひじょう)の心(こゝろ) これ道(みち)と

深(ふか)き悟(さと)りを得(え)たまえり

その後(そのご)、京都(きょうと)に善知(ぜんち)識(し)をたずね、比叡(ひゑい)山(さん)では天台(たいたい)教学(がくぎやう)を学(まな)び、さらに紀伊(きい) (和歌山県)で臨濟(りんざい)の教(きょう)えに参(ま)じて、再び(ふたたび)宝慶寺(ほうきょうじ)の寂円(じやくえん)禅師様(寂円禅師様)をたずねたのち、永平寺(えいへいじ)の義介(ぎかい)禅師様(義介禅師様)のもとに戻(かえ)りました。



「大乘寺(だいじょうじ)」坐禅堂 外単(がいたん)

加賀(石川県)の大乗寺のご開山となられた義介禅師様にしたがって大乘寺へ移り、いよいよ坐禅修行を深め、その力量が熟されていきます。そして、ついに大悟徹底(おさとりを得ること)し、義介禅師様より印可証明を受け、正伝の仏法を相続した(嗣法)のでした。三十一歳のときのことです。その翌年には、道元禅師様、懷持禅師様、義介禅師様と伝えられたお袈裟を伝授されています。

瑩山禅師様のおさとりのきつかけは、「平常心是道」という教えでした。一般によく使われる「平常心—へいじょうしん」は、いつもとかわらない「ふだんの心」と説明されます。仏教で説く「平常心—びょうじょうしん」は、それとは意味が異なります。瑩山禅師様は、「平常心是道」について、まっ暗闇をまっ黒いものが走る(黒漆の崑崙夜裡に走る)、お茶をいただいたときはそのお茶を、ご飯をいただいたときはそのご飯をいただく(喫茶喫飯)と説かれました。まっ暗闇の中にまっ黒いものがあっても、見分けが付きません。そこにあるのは、自他の境目や垣根、区別のない「ひとつの世界」です。わたしたちの迷いや悩みは、是非・善悪・好き嫌いなど、ものごとを分別して相対的(ふたつ)にとらえるところに生じるといってよいでしょう。思慮分別を超越した「ひとつの世界」には、迷いや悩みはありません。だしてくださったお茶やご飯を有難くいただく。お茶ではなくコーヒーがよかったと相対のおもいをはさんだり、食事をしながら別のことを考えたりしない。ほかのことは持ちこまず、目の前のことにひたすら向きあう。目の前

のこととひとつになって行なう。日常生活のあらゆることに、ていねいに、じっくりと向きあっていく。それが、喫茶喫飯における「ひとつの世界」であり、「平常心是道」の教えといえましょう。「ひとつの世界」をよりやさしく、より具体的に、日常のことばで説かれたところに、瑩山禅師様の人びとへのおもいが感じられます。

二十八歳で、阿波(徳島県)の城満寺の住職に迎えられます。城満寺では、広く仏法を伝えるため、盛んに「授戒会」をつとめて、教化救済の願行を実践しました。義介禅師様から法を嗣がれたのは、この四年間の城満寺住職時代とされています。また、肥後(熊本県)の大慈寺に法の叔父にあたる寒巖義尹禅師様をたずね、薫陶を受けています。

そののち、義介禅師様の願いもあつて、大乘寺へ戻り、義介禅師様を支えて、さらなる精進を重ねます。そして、三十五歳のとき、義介禅師様より大乘寺を受け継ぎ、第二代住職とられました。以後、十五年間にわたって住職をつとめ、さまざまな教化救済に尽力していきます。そのご様子は、次号にて。

みなさまへ

● 月例行持を再開します

コロナ禍により、お休みさせていた
だいておりました月例行持（坐禅会・
写経会・梅花講）を再会いたします。
再開にあたりましては、引続き、マス
ク着用・消毒などの感染対策を行なっ
てまいります。皆様のご理解とご協力
のほど、よろしく御願ひ申し上げます。
再開の時期など、くわしくは、お気
軽におたずねくださいませ。
皆様のご参加をお待ちしております。

● 振替口座をご活用ください

新井寺では、ゆうちょ銀行の振替
口座を開設しています。どうぞ、ご
活用ください。

記号番号 00150-2-292969

● これからのしんせいじの行持
どなたでも参加いただけます

七月十六日	おせがき法要
九月二十三日	秋ひがん法要
十一月十八日	秋葉火防大祭
十二月八日	釈尊成道会
十二月三十一日	年越し坐禅会

※ 変更や中止となる場合があります

● 月例坐禅会 ● 月例写経会

● 梅花講（御詠歌）月一回 午前九時半

※ 月例行持の詳細は おたずねください

テレホン法話のご案内

八月二十二日～二十八日

『こころがうごかされるとき』

副住職の法話です

曹洞宗テレホン法話（無料）

0120(508)740

携帯電話から（有料）

03(3454)5410

「テレホン法話」は、その番号に電話
をかけると、あらかじめ録音された和尚
さんの法話を聴くことができるサービ
スです。さまざまな宗派や宗教機関など
で行なわれています。曹洞宗の場合、専
用のフリーダイヤルなのでお金はかかり
ません（携帯電話からは有料）。時間は約三
分間。一週間ごとにお話が変わります。
数年前から年に二回、副住職がこのテ
レホン法話の執筆をさせていただいで
います。三分間では深く掘り下げたお話
はできませんが、三分だからこそ、気軽
に聴けるといふよさもあるかもしれま
せん。お聴きいただけましたらさいわい
です。

編集後記



修行させていただいた尼僧堂（修行道場）

の一〇〇周年記念行事に参加しました。
おもいがけずの再会もあり、ご指導いた
だいた先輩や同釜の飯を喫した仲間た
ちの姿に、励まされるものを感じました。
法要では、詠讃歌をお唱えさせていた
だきました。脚はガクガク、声はブルブ
ルの緊張で、充分なお唱えができず、ま
ことに申し訳なく慚愧にたえないおも
いでいっぱいです。あとで気がついたこ
とですが、わたしがお唱えをさせていた
だいた場所には、御開山様や尼僧堂を護
り導いてきてくださった諸老師方のお
写真が飾られていました。みずからの未
熟さ、いたらなさを真摯に反省し、「さら
に参ぜよ三〇年」と、その諸老師方に策
励をいただいたおもいがしています。
詠讃歌の道も、仏道もはるかなる道で
す。その道のはるかなることを思うと、
こころが折れてしまうこともしばしば
ですが、わたし自身を支え導いてきてく
ださったさまざまご縁に感謝をし、い
つまでも謙虚に学び続けてまいりたい
と願っています。

暑ささびしき毎日、ご自愛くださいませ。